名古屋柳城短期大学
ちゃぺるにゅーす
第26号
2014年7月22日

平和を大切にするとは

チャプレン　田中　　誠

「平和を実現する人々は、幸いである」
（マタイによる福音書第５章９節）

平和という言葉は、内容的に多くの意味を含んでいます。広くは国と国との関係においてお互いが相手にとって脅威とならない関係を表す意味として。あるいは、極身近な関係の中での家庭内平和、平和なクラスといった言い方もあります。いずれも限られた範囲の中での人間関係が良好な状態を意味します。

それでは「平和を実現する人」とは、どのような人でしょうか。最近目にしたニュースでサッカーの日本の最初の相手国コートジボワールの有力選手のことを印象深く覚えています。この国は国内でいろいろな部族が勢力争いをしていて紛争の絶えない状態でしたが、サッカーでワールドカップに出たいと思った選手たちは、そうした部族対立を乗り越えて協力することで強くなりアフリカ代表としての出場権を獲得したそうです。そして自分たちがテレビに出たときに有力選手が訴えたことは「自分たちは対立を乗り越えて団結したことにより強いチームを作れた。今度は皆さんが一致協力して国としてまとまってほしい」という趣旨のことでした。その結果、今まで対立していた部族が交渉をして紛争が収まったということでした。実際にテレビの映像で、その場面を見て大いに感動しました。

一方で日本と一番身近な国、韓国と中華人民共和国との関係は、現在は戦後最悪の状態です。原因は簡単ではありません。お互いに自分の立場を主張しますから「相手が悪い」としか言いません。おまけに過去の戦争について、どう考え、評価するかが大きな要因になっていますから、ますます複雑です。しかし、相手と十分な話し合いの機会を作れないでいる中で相手から攻められたら、どう反撃するかを考えて用意をしようとするのは早急にすぎないでしょうか。東京の新大久保近辺は在日韓国朝鮮人の人々が多く生活している地域です。そこにわざわざ行って悪口を言い、相手の尊厳を傷つける行為をする人は、どう考えているのでしょうか。新大久保の駅でホームから落ちた日本の人を助けて自分が亡くなった韓国人の青年が讃えられたのは、そんなに昔のことではありません。

本来、人と人はお互いの存在を尊重しようとしていると思います。しかし、自分が試験に失敗したり、自分が仕事を失ったりといった落胆するような出来事が起こると、本来自分に原因を求めるべきことを誰か人のせいにするといったことは、心の弱い人に起こりがちです。自分は正しい、自分は優れている、しかし、あの人たちがいるからうまくいかないのだ、というように勝手に決めつけて非難するようになると大変です。

人と人との関係は、お互いの主張がぶつかれば簡単にはうまくいかないのが当然です。そこをうまく調整して平和な関係を築くのは、努力と忍耐力が入ります。相手の考えをじっくりと聞くこと、相手から指摘されている自分の問題点を客観的に検討してみること、どれをとっても「忍」の一字です。

礼拝の中で「平和の挨拶」をします。これは、神様の前に出るのにあたって自分と人との間で争いごとを抱えているのはふさわしくない、と聖書に記されている（マタイによる福音書第５章22～26節）ことから周囲の人との和解を確かめる意味もあります。実際に誰かと争うようなことが起こり、被害を受けるようなことが出てくれば、忍耐強く和解を求めることは容易ではありません。そこには平和に対する強い信念ともいうべきものが必要です。

様々な経験をする中で人は叡智を積み重ねていきます。そうしたものの蓄積の上によく考え判断をすることでより良い道が選ばれていく、そうした歩みを大切にしたいと思います。

前期の礼拝から
「学びをとおして人生の主役に」
－礼拝（２年生）の講話（６月１日）から－

新海 英行（学長）

地球の人口が100人としたなら、高等教育を受けている人は何人だと思いますか。正解は、何とわずか１人にすぎないのです（池田香代子再話・C.クラウス対訳『世界がもし100人の村だったら』）。ちなみに、日本では、50パーセントを超える若者が何らかの高等教育機関で学んでいます、文字どおり高学歴社会です。その一方で世界中を見渡すと、高等教育どころか、小学校にさえ通えない子どもたちがたくさんいます。学校のない地域も少なくありません。

ユネスコ（UNESCO国連教育科学文化機関）は、教育や科学や文化を世界中の人びとが等しく享受できるように、また世界遺産を保存するために、なかでも貧しい国や地域に学校をつくり、教育を広く普及するために熱心に活動しています。こうした学校づくりをとおしてユネスコは、「どんなに貧しくても、だれもが学校に行き、学ぶことができる世界にしよう」と呼びかけ、「学びの権利宣言」（1985年）を世界に発信しました。

この宣言には、つぎのように述べられています。

「学ひの権利とは、まずは、読み書きできるようになる権利です。」

「読み書きできるようになれば、自ら問い、ものごとを深く考えることができるようになります。」

「さらに、ものごとの背景にあるものを想像し、新しい考えを創造する力が育ちます。」その結果、「自分自身の世界（生き方や立ち位置）を読みとり、（自分と世界の）歴史を切り拓いていくことができるようになります。」学びとは、そのような営みであり、それはだれもが有する権利です。そして、この学びは、何よりも「私たちを、なりゆきまかせの客体（脇役）から、自分の人生を創造する主体（主役）に変えていくものです。」

この宣言は、とくに発展途上の南の国々（第三世界）に生きる貧しい人々だけに向けて述べられたのではありません。発展した北の国々に住む私たちにも向けられていることを見逃すことができません。識字率は高いけれど、ほんとうに学びをとおして想像し、創造する力を身につけ、自らの人生の主体（主役）に成長できているのだろうか、宣言は、このように語っています。

さて、この宣言の背景には、1960年代末から80年代にブラジルを中心に南アメリカで高揚した「解放の神学」が存在しています。この神学を信奉する人びとの実践の一つが、識字教育運動でした。それは、学校に行けない子どもたちや教育を受けられなかったおとなたちに文字の読み書きを教会や路上で教えるというものでした。この運動の最高の指導者はパウロ・フレイレ（1921-1997）でした。彼は、支配と抑圧からの民衆の解放をめざすキリスト者でしたが、軍事政権によって国外追放され、ユネスコを拠点に運動を世界に広げました。ブラジルでは、「解放の神学」を精神的基盤とする識字教育運動が各地に展開し、これによって人びとが目覚め、軍事政権を崩壊させました。まさに文字の読み書きの力が民衆を主役にし、自分たちを呪縛していた支配と抑圧からの解放を実現したからです。

学びの権利宣言は、今でも私たちに学びの大切さを示唆しています。みなさんも、この１年そして２年、ぜひほんものの学びに取り組み、みなさんの中に潜在する可能性を見つけ出し、それに磨きをかけ、人生の主役にたくましく成長できるように、と心から願っています。

前期の礼拝から

「心が弾めば、身体は動く」

水落 洋志（短大教員）

6月18日（水）に合同礼拝が行われました。外部講師として江崎理子さんがピアノ＆ゴスペルを披露して下さいました。ゴスペル（Gospel）とは、God SpellからGood Spell（良い知らせ）が変化した言葉だと言われており、日本語では、福音（良い知らせ）と訳されています。17世紀に奴隷としてアメリカ大陸へ連行されたアフリカ人が、自由を剥奪され、救いを与える福音と出会い、神に彼らの賛美をささげるようになったのがゴスペルの始まりだそうです。

少し学生のざわめきが聞こえる中で、江崎さんが発する美しく豊かな響きのある声とピアノに400名近くいた学生たちの心は１つにそして、まるで大きな円のような一体感に体育館は包まれていきました。そして、江崎さんの先導に学生たちは内からでる喜びを声と身体で表現していました。そんな、素晴らしい時間はあっという間に過ぎ去り、終わった後の学生の満足そうな笑顔を見ていて色々と考えさせられました。

人を惹きつけるとは何か？人を動かす要因とは何か?についてです。答えは、「心」。私も含め学生も、江崎さんのピアノ＆ゴスペル

を聞き、心が動かされたのです。そんな時に、こんな言葉と出会いました。八木重吉さんの「太陽」という詩です（八木重吉詩集；旺文社刊，1997）。

あなたは総べてのものへはいりこむ　炭にはいっていて赤くあつくなる
草にはいっていて白い花になる　恋人にはいっていて瞳のひかりとなる
あなたが神の重い使いであることは疑えない
あなたは人間の血のようなものである
地の中の水に似ている　不思議といえば不思議である　有難いといえば実に有難い
あなたより力づよいものがあるだろうか　あなたが亡ぶる日があろうか
そして別のあたらしい太陽がかがやく日があろうか　あると基督はおしえられた
ゆえにその日はあると信ぜられる　しかしその日まであなたは此の世の光りである
見える光りは見えぬ光りへ息吹を通わせている　あなたの高い気持ちにうたれた日はしあわせな日である

江崎理子さんのピアノ＆ゴスペルは太陽のように皆さんの心を照らし、気づいたら上を向いているかのように身体が動かされていたと思います。是非とも今後、また機会があれば学生へ聞かせたいと思いました。

前期の礼拝から
「あなたの心をノックしておられる神様」

柴田 智世（短大教員）

「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」ヨハネの黙示録３章20節

今日は、皆さんのお誕生日だとしましょう。夕ご飯を誰と一緒に食べたいですか？私達は、安心できる人、心を許すことのできる人と食事をしたいと考えますね。また、出会ったばかりで、まだ相手のことをよく知らないが、これから親しくなりたい、興味をもっている時にも食事を共にしますね。今日の聖書では、「食事」をたとえにして神様が皆さんに語っているメッセージを考えたいと思います。

私は、小・中学生時代は仏教に興味があり、般若心経を唱えることや日曜日に一人でお寺に行き、お坊さんの話を聞くことが好きでした。それらの話に共感し、心に平安がありましたが、いつも「人は死んだらどこに行くのだろう？」という疑問を持っていました。そして、ある時思い切ってお坊さんに尋ねてみたところ、「この世で徳を積んだ人は天国に、そうでない人は地獄に行くのですよ。」との回答に、「自分はどちらに行くのか、またそれは誰が決めるのか？」と考え、死への恐れと共に、しばらくしてお寺に行くのをやめてしまいました。

高校を卒業し、私はキリスト教を信じているＡ先生から、生まれて初めて聖書と神様の話を聞きました。先生はいつも穏やかで優しく、厳しい中にも愛のある方でした。これまで中・高校時代の管理教育に対して不信感を持っていた私は、先生に今まで出会ったことのないとても魅力的なオーラさえも感じていました。

先生は、幼いころ戦争を経験され、ご一家が生活できない貧困の極致にまで追い込まれましたが、キリスト教の路傍伝道をきっかけに、お母様が神様を信じるようになって生きる希望が与えられ、もう一度頑張ってみようと人生が方向転換された、という証を授業の中で聞き、私は大変感動しました。そして、先生と親しくなりたい、もっと神様の話を聞いてみたいと思うようになりました。

まもなく、先生から学内サークル「聖書研究会」に誘われ、一緒に聖書を読み、聖歌を歌い、お祈りの仕方も教えて頂くようになりました。メンバーは私と先生のたった２人でしたが、心が満たされるのが分かりました。しかし、正直なところ、信者になりたいと思っていたのではなく、キリスト教を教養の一つとして学ぶことができたら十分だと思っていました。

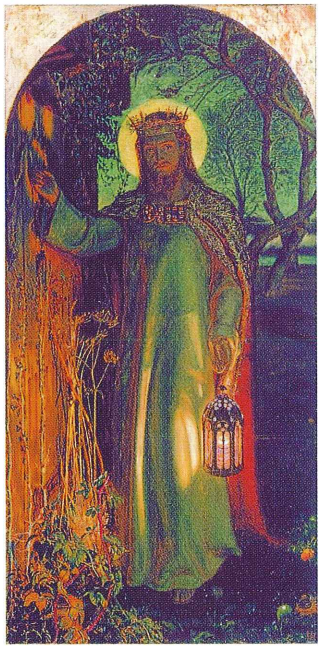
そのような私に転機が訪れました。私は当時、気管支喘息を患っており、季節の変わり目などは発作に悩んでいました。ある朝、目を覚ますと発作が出て呼吸困難になりました。いつもなら、薬を服用することによって治まるのですが、その日に限って手元に薬がありませんでした。病院には行きたくない、何とかできないかと考えを巡らせたところ、Ａ先生から「病気や悩みなどの苦しい時は神様にお祈りするといい」と言われたことを思い出しました。私は、だまされたと思って祈ってみようと思い、「神様、私の発作を今すぐに治めて下さい。このお祈りをイエスキリストの御名によってお祈りします。アーメン。」と祈りました。すると、ほとんど時間をおかずに、スーと波が引いていくかのように気管支の苦しみが静かに消えていくのが分かりました。聖書の中には、キリストが盲人の目を見えるようにしたことや、長い間寝たきりだった人が歩くことのできるようになる等、多くの奇跡を行った話があります。それらは

単なる昔話や伝説でもなく、今も生きておられる神様が私を憐れんで下さったのではないかと考えるようになりました。そして、私を死の恐怖から救って下さった神様を心から信じる決心をし、３年後に洗礼を受けました。

冒頭の聖書にもあるように、神様はいつもドアをノックされています。外側にはドアノブがないため、外からは開けることができません。中にいる人だけが開けることができます。では、中にいるのは誰でしょうか？それは、あなたです。あなたがドアを開けるのを、神様は待っておられます。なぜでしょうか？それは、「あなたと食事をしたい」と思っているからです。先にも述べましたように、これから相手と仲良くなりたい時に私達が食事をするのと同様に、神様も、「あなたのことを良く知りたい、あなたの願い、希望等を私に話してほしい。」と望んでおられるのです。

また、「あなたの友人となって、あなたの悩みを聞き、その苦しみを一緒に担いたい。」と招いておられるのです。このノックする神様が、偶然（……いや、神様には偶然という言葉はなく、全て完璧に備えられていると私は信じておりますが）、マタイ教会の礼拝堂入り口に『世の光』というタイトルで、イギリスの宗教画家であるウィリアム・ホルマン・ハント（1827 - 1910）が作品に表現しています。

あなたが勇気を出してドアを開く時、神様は喜んで迎えて下さることでしょう。その時、これまで暗闇だったあなたの心（先ほどのハントはその絵の中で、暗黒の中のいばらとして人の心を描いています）に光が与えられ、喜びを持って生きる人生へと変えられていくことを祈っています。



ウィリアム・ホルマン・ハント
William Holman Hunt
（1827-1910）
『世の光』【出典】
http://art.pro.tok2.com/H/Hunt/Hunt.htm
ヴァーチャル絵画館

新任教職員紹介

神様の不思議さ

岩田 牧夫（法人職員）

こんにちは。４月から法人事務局でお世話になっています。皆さんに直接お会いすることは少ないですが、理事会のお手伝い、学院全体で取り組む課題などの仕事を行っています。

私は祖母の時代からのクリスチャンホームに育ちました。クリスチャン３代目ということになります。子どものころから教会に通っていましたが、学生時代は日曜日に友達と遊ぶことが多く、教会から遠ざかっていました。しかしある時、日曜学校のキャンプでお手伝いをしたことがきっかけで、それ以来約30年日曜学校のお手伝いをしています。日曜学校では子どもの礼拝を行い、その後ゲームや工作で楽しみます。人数は多くはなかったですが楽しくやってきました。

この奉仕が、自分を教会に結び付ける大きな力になったと思います。子どもに聖書の話をするには、自分が聖書を知らなくてはなりません。聖歌もそうです。自分なりに何とか理解しようとしているうちに、だんだんと神様のことを近くに感じてきました。それと、子ども達の成長の素晴らしさも実感しました。子ども達は毎週成長していきます。体の成長も知識の吸収もすごいです。それを通して、人間が生きていることの不思議さ、この世界が存在する不思議さを考えさせられました。これは人間の知恵と力をはるかに超えた大きなものに支えられているからと思います。どうか、皆さんも柳城での学生生活を通して、神様の不思議さ、偉大さを感じ取っていただきたいと思います。

柳城で働かせていただくようになったことは、自分の人生の大きな出来事で喜びです。教会の近くで働ける。それも、保育や介護の道を志す方々が学ぶところで。どうぞ皆さん、これからよろしくお願いいたします。

2014年７月22日発行　第26号
発行所　名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54
編集兼発行者　キリスト教センター
印刷所　株式会社 マルワ

編集後記

「平和を実現する人々は、幸いである」（マタイによる福音書 第５章９節）

山上の説教と呼ばれているイエスの言葉の中にあるこの聖句が、今年度のチャペルとキリスト教センターの年間標語です。こんな時代だからこそ、深く心に刻みたいみ言葉です。

今年度も、学生たちが、東北の被災地の方々を支援するボランティア活動を続けています。大きく重たい現実の中での、小さな小さな活動です。それでも、学生が勉強や実習のあいまを縫って準備をしてきた活動を通して、被災地の方々と触れ合い、その交流の中で笑顔が生まれるのを見ると、大きな恵みを感じます。厳しい現実の中でのほんの小さな交わりや笑顔ですが、そうした場には、ささやかではあるけれども具体的なかたちをとって、主の「平和」が実現されているように感じます。（M）